

底

ヨコテ

夕刻にはまだ間があるというのに、辺りはすでに薄暗くなってしまい、窓の外では風が激しさを増していた。雨もひどくなってきていて、時折、窓ガラスを強く叩いている。それはこれからの天気が急激に荒れてくるのを十分に予見させた。

何もこんなときに――と、郷田は胸中で愚痴り、不満を持った。大型の台風が近づいており、今夜にも上陸するという。だが、社長の田所に頼まれたのでは断れない。半端者の自分を雇ってくれていることに恩義を感じていたし、田所の機嫌を損ねたが最後、昔の貧乏で惨めな生活に堕ちるのは明らかだった。五十を過ぎた郷田に再就職は厳しい。この小さな会社にしがみつくなかった。

「……それで、何処へ棄てに行けばいいんですか？」

事務所の窓から見える外の荒れ始めた光景に目をやりながら、郷田は廃棄物の棄て場所を訊いた。机に地図が広げられているところを見ると、どうやらこれまでとは違う新規の場所のようだ。別に何処でもよかったが、できれば近くであるのを願った。台風が近づいているこの風雨の中、長時間にわたってダンプを運転したくはないし、時間外手当が出るわけでもない。

「ああ、山の中だ。新しい場所……ここだ。覚えているだろう？」

田所が地図に記された赤い丸印を指差す。郷田には覚えがあった。二週間ほど前、田所に連れて行かれた場所だ。鬱蒼としていて、昼間でも暗い場所だった。

「先日行った今村さんの土地じゃありませんか」

許可を得るために訪問し、その折に見せた今村の嫌悪に満ちた目が思い出される。プライドが高く、自分以外の誰も信用しないという目だった。まさに頑固爺の言葉が似つかわしい。

郷田は顔をしかめた。

「ああ、そうだ」と、投げやりに田所が言う。

「取り付く島がないというか、まったく話し合いになりませんでしたから、とても許可してくれないと思ってたんですが、よく許可してくれましたね。あのあとも社長は粘り強く交渉に行ってきたんですね」

田所の押しの強さに、あの頑固な老人もさすがに根負けしたのだろうと、郷田は思った。だが、それは違った。

「あの爺さんが許可なんかする訳ないだろう。黙って棄てるんだよ」

再訪したかどうかには触れず、田所は事もなげに言った。

「また不法投棄ですか……」

郷田は嘆息とともに呟いた。

産廃業者である『田所産業』は、時には不法投棄もやっている。社長の田所と郷田が秘密裏にやっていることで、他の社員は知らない。総勢四人の零細企業では、そうやって少しでも利益を上げていかなければ、会社の存続は厳しかった。いつしか覚えた蜜の味――良心に痛みを抱きつつも、郷田は田所に命じられるまま唯々諾々と従ってきた。自分を騙しながらの不法投棄はこの先も続くだろう。

「まあ、そう言うな。今村の爺さんが行方不明なのは知ってるだろう？ だから今のうちにな」

田所がにやりと笑う。

平気で他人の不幸を利用できる男――知ってはいたが、こうあからさまに示されるとやはり不愉快だった。

今村老人が行方不明なのは運転中のラジオで知った。五日ほど前から姿が見えないらしい。

高校の校長を定年退職したあとは先祖伝来の山中で一人暮らしをしており、近所といえるものはない。訪ねて行った地区の世話役が不審に思ったことから行方不明が発覚したのだが、失踪が五日前からなのか、もっと前からなのかははっきりしない。家を荒らされた様子はなく、預金通帳なども残っていて強盗に遭ったのではなさそうだった。一人で旅行に出た形跡もないので、山中の崖から落ちるなど、事故に遭ったのかもしれないとすぐに付近の捜索が行われたが、発見できないまま今日に至っている。今村老人は、まさに忽然と姿を消していた。

「今村さん、何処へ行ったんでしょうね。ひょっこり帰ってきたりして……。知り合いのところちょっと行ってただけかもしれませんよ。帰ってきてあそこに廃棄物があったら、すぐにばれてしまうんじゃないですか？」

地図を眺めながら、郷田は不安の面持ちで訊いた。

「お前は心配性だな。だからモテないんだ」と、茶化して田所が言う。

大きなお世話だ。ちょっとモテたからといって――。

「でも、今村さんのところへ行ったのはつい二週間前ですよ。いくら年寄りでも覚えているでしょう。処分場にに使わせてくれって、二人してお願いに行ったじゃないですか。帰ってきた今村さんが廃棄物を見たら真っ先に疑われますよ」

どう考えても上手くいく訳がない。事は簡単に露見してしまうだろう。

「大丈夫だ」

「えっ？」

田所のやけに自信に満ちた口調に郷田は驚いた。

「心配するな、ばれるはずがない」

田所はまたもにやりと笑い、心配するな、と繰り返した。

何故、大丈夫なんだろう？ 心配するなと、どうして言えるのだろう？

きっぱりと言える、何か根拠があるのだろうか。

「社長は何か知っているんですか？」

まさかとは思いつつ、郷田は訊いてみた。

「俺が知るわけないだろう」

憤然と田所が言う。しかし、それは心から怒っているのではなく、本心を見透かされないために慌てて繕ったように郷田には見えた。話を逸らすかのように、田所が言葉を継ぐ。

「早く行かないと台風がひどくなるぞ。今夜にも上陸するそうじゃないか」

それもよく分からない。こんな台風の夜に、何故そんなに急ぐのか。

「どうしても今夜じゃなきゃ駄目ですか？」

「早いほうがいいに決まっているだろう。明日は別の仕事があるんだ。先方に、当日になって延期して欲しいなんていえないだろう、信用に関るからな。うちみたいな零細企業は信用が第一だ。言われた日にきっちり仕事をこなす、そうしないと信用は勝ち取れないんだ」

訓示を垂れるように田所が言う。すでに信用してもらえそうにない会社なのは社長が一番よく知っているはずだ、と郷田は言ってやりたかった。安く請け負う『田所産業』を使ったほうが経費が掛からなくて済むから依頼してくるのであって、そこには信頼や信用なんてものは存在しない。『田所産業』が不法投棄を行っているのは薄々勘づいているはずだ。

「それじゃ、諦めて行ってきますか。ああ、安川が羨ましい」

郷田は、もう一人のドライバーがさっさと仕事を切り上げて帰ったのを愚痴った。

入って六ヶ月の新人は、世間的には好青年といえる、万事にそつのない男で、悪く言えば要領に長けている。見た目もまあいい。高校を出て五年ほどフリーターをやっていたらしいが、詳しい履歴は知らない。

『田所産業』にはもうひとり、事務員の松本尚美がいる。二十二か三の若い娘で、新人の安川利彦と早くもくっついている。バツイチの郷田は面白くなかった。今頃は安川のアパートでヨロシクやっていることだろう。それに引き換え、自分はほんのちょっとの時間差で余計な仕事をやらされ、台風が近づいているというのに山の中に行かなければならない。まったくの貧乏くじだ。

「残業代の代わりになるものを何かくださいよ。そうだなあ、『ようこ』のボトルでどうですか？
一番高いやつ」

スナック『ようこ』のママは文字通り、陽子といい、田所といい仲だ。若い頃には悪さをしたこともあったらしい。郷田の元嫁の名前も洋子といい、看板を見てふらりと入ったのは一年前だった。淡い期待を抱いて通いつめたのだが、しみったれた飲み方しかできない郷田は相手にされず、三ヶ月も経たないうちに田所と懇ろになってしまった。

「お安い御用だ」

行った、行ったと田所が手を振る。

郷田は雨合羽を着込み、激しい風雨の中へ飛び出した。三台のダンプが並んでいる。ずぶぬれになった靴で廃棄物の積んであるダンプに滑り込む。シートに覆われた中身はビルの解体現場から出たコンクリート片だった。

「なんで俺ばかりが……」と、エンジンを始動させながらぶつぶつとひとりごちる。

フロントガラスを大粒の雨が叩き、風が唸りをあげている。

これから行く山、今村老人の所有する山までは一時間くらい掛かる。台風が接近している今日はもっと掛かるのは確実だ。貧乏くじを引いた郷田はヘッドライトを灯し、ダンプをゆっくりと国道に走らせた。雨のカーテンで視界が非常に悪く、センターラインを時折見失ってしまう。警報発令を報せるパトカーがスピードを落として通るだけで、他に車はなかった。

黒い雨雲が垂れ込めた商店街は軒並みシャッターを下ろしており、ゴーストタウンと化していた。電線が風に煽られて激しく揺れている。今にも切れそうだ。看板も飛ばされそうで、すでに飛ばされたものがあるのかもしれない。自転車が将棋倒しになっていて、ゴミバケツが歩道を転がっている。暖かい家の明かりの中で、誰もが息を潜め、嵐が過ぎるのを待っている。自分だけが嵐の中に放り出されていることを郷田は恨めしく思った。あと二時間くらいの辛抱だ、と自分に言い聞かせるが、ダンプを襲う激しい風雨に、漠然とした脅威を抱き始めていた。

市街地を抜け、ダンプは海辺の道路に掛かった。隣県とを結ぶ幹線道路の、南国情緒を醸し出しているおおきな椰子の木が折れそうなくらいにになっている。帰ってくる頃には何本か倒れていることだろう。海は鈍色で、荒れる波がテトラポットに砕けている。それは狂っているかのよう、間断なくすさまじい飛沫を上げている。

郷田は煙草に火をつけ、ラジオのスイッチを押した。陽気な音楽のチャンネルを変え、台風情報に耳を傾ける。

「非常に大型の台風九号はゆっくりと北上を続けており、今夜九時頃には県東部の海岸に上陸し、山間部を通過する見込みです。今後、雨風ともにますます強くなりますので、充分にお気をつけください」

郷田は腕時計を見た。五時七分。いくらなんでも九時までには家に帰り着けるだろう。

ラジオは台風情報を終え、他のニュースに変わった。消そうと伸ばした手を、郷田はハンドルに戻した。

「.....行方不明の今村茂蔵さん、七十歳の消息は未だ掴めていません。今村さんは一人暮らしで、山林王とも称されるほど広大な山林を所有されており、警察では今村さんが何らかの事件に巻き込まれた可能性もあるとみて、事件、事故の両面から捜索中です。何か情報をお持ちの方は最寄の警察までお願いします」

事件に巻き込まれた――。今村老人はただの失踪ではなかったのかもしれない。

郷田の脳裏に田所の顔が浮かんだ。

社長は何かを知っているだけでなく、今村老人の失踪に関っているのではないか――。

それはほとんど確信めいたものだった。

田所は酔うと必ず口癖のように、俺はやくざを半殺しにしたことがある、と口走る。嘘か本当かは分からないが、日頃の言動を鑑みると、あながち嘘とも思えなかった。長い付き合いの中で、警察沙汰を起こしたことはないが、それはいつでも起こりうることだった。現に不法投棄に手を染めている。そのときは同罪か。あんな社長と一蓮托生となることに、郷田はやりきれなさを感じた。

二週間前、郷田は田所とともに、産廃の新たな処分場を今村老人の山林に求めた。それまでの半年ほど、あちこちの場所を探し回って何の収穫もなかったのに、何処から聞き込んだのか、田所は今村老人の土地に目をつけた。そこは廃棄場所に絶好の地形をしていた。掘り鉢状になっており、まさしく自然が作り上げた馬鹿でかいゴミ箱だった。縁までダンプを乗りつけることもできて人目に付きにくく、夜であれば誰にも見咎められないだろう。自然のゴミ箱を前に、田所は小躍りしそうなくらい喜んだ。不法投棄が頭をよぎったのは難くない。

しかし、そんな喜んでる田所たちの前に突然、今村老人が現れた。前に一度、不法投棄されたことのある今村老人は時々見回りにきていた。不届き者が再び現れたと思った今村老人は、にべなく追い返そうとした。せっかく見つけた絶好の場所を諦めがたく、田所は誤解を解くために必死に抗弁した。不法投棄を考えていたことはおくびにも出さず、見たこともないほどの低姿勢で今村老人に相對した。それでも今村老人は首を縦に振らず、話し合いは物別れに終わった。高校の校長として長年、多くの学生と接してきた今村老人の目には田所の胡散臭さが一目瞭然だったのだろう。帰りの車中で田所は今村老人を散々罵倒した。

あれっさり進展はなかったはずだが、やけに自信たっぷりに田所は、大丈夫、心配するな、と口にした。この二週間に社長と今村老人の間で何かがあったのは確かだろう。そして、今村老人は失踪したままだ。

社長が関っているのは間違いない――。

荒れていた海が視界から消え、ダンプは山へ向かう道へと進路を変えた。相変わらず風雨は激しく、道路わきの家の屋根瓦が飛ばされていた。畑に設えられたビニールハウスは骨だけになっていた。かろうじてビニールの端が引っかかったままで、空へと昇る龍のようにはためいている

。

荷台を覆っているシートは大丈夫だろうか、と郷田はバックミラーに目を馳せた。幸い、バックミラーに移るのは闇だけで、シートが剥がれている様子はなかった。

郷田のダンプは順調に走った。これなら二時間ちょっとで事務所まで戻れそうだ。どんなに遅くかかったとしても、九時前には戻れるだろう。戻ったなら早速、『ようこ』で一杯やるかと思っただ、この台風で『ようこ』が臨時閉店したのを思い出し、ひとり寂しく飲むしかないかと、郷田は諦めの溜め息を吐いた。

道が狭くなってきた。もう辺りに人家はない。ヘッドライトが未舗装の、ぬかるんだ道を照らしている。激しい風に煽られた木の枝がフロントガラスを叩き、郷田はひやりとさせられた。それはまるで何かを警告するかのようだった。右下へ分かれる道が見える。その先に今村老人の家があったのを郷田は思い出した。

今村老人は何処にいるのだろう。こんなにも見つからないということは、ひょっとして――殺されたのだろうか。

ずんずんと坂道を登る。あとは掘り鉢状になった窪地の上までダンプを乗りつけ、そのまま廃棄物を棄てる、それだけだ。腕時計を見る。六時二十一分。六時半過ぎには帰路につけるだろう。

道幅がさらに狭まり、郷田は慎重にならざるを得なかった。一步間違えば谷へ真っ逆さま。そろりそろりとダンプを進める。

やがて目的の窪地の上に辿り着いた。切り返しを行い、窪地に荷台を向ける。激しい風雨の中、ダンプを降り、後ろを確かめる。崖の縁まではまだ距離があり、荷台を上げても廃棄物は下に落ちない。あと二メートル下がればちょうどよさそうだ。びしょぬれになった郷田は泥にまみれた靴のまま、再び運転席に座った。注意深くダンプをバックさせる。泥の靴で少しだけアクセルを踏み込む。慎重に慎重を期す。

と、奇妙な感覚が郷田を包んだ。――浮遊感。宙に浮いている感覚があったかと思うと、一瞬にして郷田はダンプとともに急な斜面を滑り落ち始めた。

まだ一メートルも下がっていなかったはずなのに、降りしきる雨で地盤が緩んでいたのか――

悔やんでも時はすでに遅く、ダンプは縁を崩し、重力に逆らうことなく下へと落ちていった。郷田は焦った。

ギアを入れ替え、アクセルを思い切り踏み込む。エンジンがウンウンと唸りをあげる。それでもダンプは下がるのをやめない。タイヤは泥に空回りをしており、虚しい抵抗を試みるだけだった。ずるずると滑り落ち、やがてダンプは蟻地獄のような窪地の底へと飲み込まれてしまった。

郷田は呆然として、ヘッドライトの照らす雨粒を見ていた。田所の怒り狂った顔が思い浮かぶ。こんなところからダンプを引き上げるのは至難の業だ。クレーン車が必要だろうが、あの山道を通れるかどうか――おそらく通れない。なにより、ことが大袈裟になれば不法投棄がばれてしまう。

郷田は大きく息を吐き、もう一度アクセルを吹かせた。勢いをつけて壁のような斜面を登ろうとする。しかし、ダンプは振動するものの、泥に滑って前へ進まない。何かタイヤに噛ませるものはないかと考えた郷田は、荷台のシートに目をやった。あれを下に敷けば――

懐中電灯を取り出し、豪雨の降り注ぐ地面に降り立つ。するとそこには水が溜まっていた。すでに膝下まである。上手くシートを敷くことができるだろうか。案じつつ、懐中電灯で照らしながら急いでシートをはずし、タイヤの下に置いた。やはり水に浮き上がってしまい、上手くいかない。郷田は足元の泥をすくってシートの上に乗せた。シートが泥の重みで水に沈む。急いで運転席に戻り、アクセルを踏み込む。が、ダンプは一ミリも進まなかった。

車体を軽くすれば動くかもしれない。

祈る気持ちで荷台を上げる。ズズズツという音とともに、廃棄物は荷台を滑り、水溜りに落ちていった。コンクリート片がボトボトと水しぶきを上げ、山を作る。

これでだいぶ軽くなっただろう。本来の目的も果たしたことだし――

心を落ち着かせてアクセルを踏み込む。唸りをあげたダンプは奇跡的に水溜りを抜け、壁のような斜面へと向かった。滑り落ちたタイヤの跡にハンドルをあわせ、さらにアクセルを踏み込む。

ダンプは勢いよく斜面を登った。悲鳴のような唸りを上げて窪地の縁まで届きそうになった。「がんばれ！ もう少しだ！」

思わず喚声を上げた郷田の、ハンドルを持つ手に力が入る。

ヘッドライトの照らす斜面がもうすぐ終わりそうだった。終わりそうになったところでその光景に変化がなくなった。動いていない。確かにエンジンは唸りを上げている。が、勢いよく登ってきて、もう少しで登り切るといところまできて、ダンプはそれ以上、前に進もうとしなかった。空回りするだけだった。いや、それどころか――後退を始めた。

「嘘だろ！ あとちょっとじゃないか！」

郷田の必死の叫びも虚しく、ダンプはずるずると下がり、元の水溜りへと戻ってしまった。郷田はもう一度アクセルを踏み込んだ。唸りを上げたダンプは――今度は奇跡を起こさなかった。空転するタイヤがジャブジャブと水を跳ね上げるだけだった。

どっと疲れが押し寄せる。

雨合羽を着ているとはいえ、首の隙間などから浸入してきた雨に身体が冷えてきていた。ぶるぶると身体を震わせ、胸や腕などを手のひらで擦りながら、善後策を考えてみる。

どうすればいい？ 今できることは？

何も思いつかない。どうやっても自力でダンプを脱出させるのは不可能なようだ。誰かの力を借りなければ――しかし、部外者はまずい――。

ぼんやりとした目に、ヘッドライトに照らされた斜面を、勢いよく水が流れているのが見えた。まるで滝のように、幾筋にもなって流れ込んできている。このまま雨が降り続いたら――おそらくそうなるだろう、そうなったらダンプは水の底。動かす術がない今、廃車は決まったも同然だ。

郷田は頭を抱えた。

半殺しにされる。

いや、半殺しにされる前に――

水かさの増加が気になり、暴風雨の中へ出た。ポチャリと水溜りに足を落とすと、さっきは膝下だったのに、わずかの間で膝上にまで達している。思った以上の水位に上昇に、郷田は恐怖を覚えた。山に降った雨がすべてこの窪地に流れ込んできている気がした。ぐずぐずしていたら自分まで水の中に呑み込まれてしまう。もはやダンプどころではなかった。とにかく、この蟻地獄のような窪地から這い上がらなければ――。

意を決し、郷田は水溜りを出て、ヘッドライトの照らす斜面を登り始めた。緩やかだった斜面がやがて急になった。一步二歩と足を踏ん張る。斜面を蹴って足場を固める。そうしないと滑り落ちそうだった。風雨の激しさに立っていられなくなり、地面に手をつく。斜面を流れる雨水が顔を叩く。四つん這いのまま、そろりそろりと斜面を登る。すると、ダンプが崩した斜面はあっというまに柔らかくなっていった。足を踏ん張ってもずるりと滑る。窪地の縁はもうすぐそこ。右足が滑り、左足が滑る。その度に新たな足場を作るが、作っても作っても崩れ、まったく先へ進めなくなってしまう。縁まで三、四メートル。一気に駆け上がれば――と、郷田は手足で地面を思い切り掻いた。必死になって掻いた。しかし、必死になればなるほど郷田の身体は後退した。ダンプと同じでずるずる滑る。何度も試みたが、徒労に終わってしまった。

郷田は泥の地面にへたり込んだ。そのまま仰向けになり、天を仰いだ。横殴りの雨がヘッドライトに照らされ、漆黒の闇から光って落ちてくる。これでもかと容赦なく、郷田の身体を痛めつける。それでも郷田はじっとしていた。脱力と疲労で動けなかった。

「ちくしょう！」と、天に向かって叫ぶ。

何で自分だけがこんな目に――

何でこんな台風の夜にやりたくもない仕事をさせられ、泥まみれになり、死にそうな目に遭わなければならないんだ――。

郷田の叫び声は山の木々を揺らす風の音に掻き消された。まるで獣の咆哮のような、圧倒的な力の前にねじ伏せられた気がした。

自力でこの蟻地獄から抜け出すのは無理だ。抜け出すどころか、助けがこなければ数時間後には溺れ死んでしまうだろう。

とにかく助けを――

郷田は跳ね起き、ダンプへ急いだ。乗り込んですぐに助手席に置いていた携帯を掴む。電波が届かなければ一大事だ。祈る気持ちで二つ折りの携帯を開くと、そこには電波状況を示すアンテナが一本だけ立っていた。かろうじて繋がっている。この状況がいつまでもつか分からない。焦りながら電話帳から田所の名前を探し、電話をかけた。田所が怒り狂うのは分かっている。だが、他に助けを求められる者はいない。

呼び出し音がする。

四回、五回――

この電話に田所が出なかったなら、との思いが頭をよぎる。『ようこ』のママに会いに行っていたら、この電話は無視されるかもしれない。

「もしもし」

田所の声が聞こえ、郷田はほっとした。と同時に、そののんびりとした口調に腹が立った。

「社長、郷田です」

「分かってるよ。もう終わったのか？」

「ええ、まあ……」

「何だ？ 歯切れが悪いな。どうした？」

「すみません、ダンプまで落としてしまいました」

「落とした？ 落としたとはどういうことだ？」

「窪地の縁が雨で緩んでいたんですよ。大丈夫だと思ったんですが、ずるずると……」

「あの窪地にダンプを落としたのか？」

「ええ。何度もダンプで登ろうとしたんですが、泥で滑って上がらないんですよ」

「なんてことをしてくれたんだ、馬鹿野郎！ 本当にドジなやつだ。使えないとは思っていたが、これほどだとな。お陰で計画が台無しだ」

「申し訳ありません。でも、まさか……」

「言い訳はいい。それより、本当にダンプは上げられないのか？」

「クレーン車でもあれば……」

「馬鹿！ そんなものが用意できるか」

咄嗟に不法投棄の発覚を察したのだろう、田所が声を荒らげた。

「でも……急がないとダンプが駄目になってしまいます。窪地に水が溜まって……膝上、いえ、もう腿の辺りまでできています。急速に水かさが増していて、早く何とかしないと……」

「チッ」

話の途中で田所が激しく舌打ちをした。

「使い物にならなくなったとしても、いずれ引き上げ……いや、それは何とかするにしても、どうしてくれるんだ？ 新たなダンプを買うのにいくらかかると思ってるんだ、弁償しろ！」

「もちろん弁償します。毎月少しずつ……」

「明日からの仕事だって、一台分減るんだぞ」

「俺が代車を借りてきます」

「なんだ、やけに素直だな。いつものお前ならぶつくさ言うくせに」

「何でもしますから……お願いします、迎えに来てください」

「ははっ、そういうことか。ダンプが動かないから帰れないわけだ。だったら、歩いて帰るんだな、何でもするって言ったんだから」

「そうもいかないんです。俺も窪地の底にいるんです。崩れた斜面が滑って登れないんです。お願いします、助けに来てください。このままじゃ俺も溺れ死んでしまいます。ものすごい勢いで雨が流れ込んでいて……」

「お前も落ちたのか。本当に……ドジなやつだな。それで、どれくらいもちそうなんだ？」

「さあ、よく分かりません。あと四、五時間なのか、二時間なのか。とにかく急いでください」

「分かったよ、そんなところで死なれちゃ困るからな。安川を行かせるか、家にいるだろう」

「ありがとうございます。誰でもいいですから早くしてください、お願いします」

電話を切った郷田は少しだけ安心し、泥まみれの身体を運転席に横たえた。瞼を閉じる。しばらく眠りたかった。

台風九号の暴風雨は町外れの安アパートも容赦なく襲っていた。

安川は借りてきたDVDを、ビール片手に観ていた。好きな俳優が出ているアクション映画で、子供の頃はカンフーの真似事をしたものだった。傍らでは尚美がポテトチップスを頬張っている。この手の映画に興味がないのか、眠たそうな顔をしている。嵐でテレビの音が聞きづらい。

「大丈夫かな？ このアパート、だいぶ古いからな」

「大丈夫よ、たぶん」

「お前は呑気だな。それにしても食べすぎじゃないか？ この頃、太ったようだし……」

「いいの、いいの」

尚美は意に介さず、ポテトチップスに伸ばす手をやめない。

「しょうがないな」と、諦めの口調で安川は笑った。

何度もリフォームされた、狭くて古いアパートに尚美が転がり込んできたのは四ヶ月前だった。軽い気持ちで始めた同棲だったが、今では尚美のいない生活は考えられなかった。何かと後ろ暗い噂のある田所の元で働いて良かったと思えたのは、唯一、尚美と出会えたことだけだった。

主人公がヒロインに顔を近づける。いい雰囲気。ヒロインが目を閉じる。甘い音楽が流れ、尚美も身を乗り出す。と、突然テーブルの上の携帯が鳴った。電話は社長の田所からだった。こんな台風の夜に……いったい何の用だろう？ 厭な予感がして、安川は電話に出た。

「もしもし、安川です」

田所の話を黙って聞いていた安川の顔がみるみる曇り、それは電話を切ったあとも続いた。

「何の電話だったの？」と、尚美が心配そうに訊く。

「郷田さんが大変なことになっているらしい」

「大変なこと？」

「この嵐だろ、廃棄物を棄てに行っ、ダンプが動かなくなっらしいんだ。それで、迎えに行っしてくれって……」

「これから？　これから台風が上陸するのよ、何もトシちゃんが行くことないじゃない。社長が行けばいいのよ。社長のほうが郷田さんとは仲いいんだし」

「そんな問題じゃないだろう。とにかく行っってくるよ。そんなに遅くはないと思うけど……」

「よりによってこんな台風の夜に……。仕方ないわね。気をつけて。外はものすごいわよ」

「分かってるって。帰りの時間がだいたい分かったら電話するよ。それから……ポテトチップスばかり食べてるんじゃないぞ」

尚美の腰の辺りに目をやって安川は言った。

急いで服を着替え、ビニール傘を差し、アパートの前の駐車場に向かう。すぐにビニール傘は反っくり返り、駄目になってしまった。あっという間にずぶ濡れになり、雨合羽を取りに戻ろうかとも思ったが、もう車のほうが近かった。五年ローンで買った中古の白い車に小走りで乗り込み、エンジンをかける。尚美に小さく手を振って車を走らせる。車は駐車場からゆっくりと闇に消えていった。ヘッドライトの中に、直前の光景を安川は思い出していた。尚美がアパートのドアを半開きにして手を振っていた。吹き込んでくる風に髪を乱されながらも、白い車が見えなくなるまで見送り、振っていた手をお腹に添えていた。

安川のアパートから田所産業の事務所までは車で五分。暴風雨の中、車を走らせた安川はあまりの風の強さにハンドルを取られそうになった。すでに濡れていたが、これ以上濡れたくなかったので事務所のすぐ前に車を停める。小さな事務所のドアを開けると、田所が渋面で待っていた。

「まったく、こんな日に……郷田さんも余計なことをしてくれる」

悪態を吐く安川に、田所が苦笑いを浮かべる。

「まあ、そう言うな。事態は深刻なんだ」

「深刻って、まさか怪我をしたとか……」

「いや、怪我はしていないようだが、これからもっとひどいことになるかもしれない」

「どういうことです？ 郷田さんは、ダンプが動かなくなって迎えを待っているだけじゃ……」

「ちょっと事情があってな、窪地にダンプごと落ちて、そこから抜け出せないらしい。だからロープを持っていってくれ」

「ロープ？ 郷田さんを引き上げるんですね。力仕事か……」

雨中の力仕事、思ったよりも時間がかかりそうだ。安川は顔をしかめた。

「赤い印がついているだろう、そこが郷田のいる場所だ」

そう言うと、田所は郷田にも見せた地図を安川にも見せた。

「ずいぶんと山の中ですね。こんなところまで郷田さんは行ったんですか……」

何故こんな遠くにまで行く必要があったんだろう……。

安川に小さな疑問が浮かんだ。そして、その答えにすぐに思い至った。会社は不法投棄をしているんじゃないか、と尚美から聞いたことがある。たまに帳簿におかしな箇所があるらしい。いつか確かめなければ、と思っていた安川は、じっと田所を見て訊いた。

「郷田さんはここで何を？」

田所が厭な顔をする。

「決まっているじゃないか、廃棄物を棄てにだよ。積みっぱなしのものがあつたらう」

「それは……不法投棄なんですよ？ ちゃんと許可を得ていない……」

「不法投棄かといわれれば、今はそうかもしれないが……なんだ、非難するのか？」

「非難するわけじゃありませんが、俺はごめんですからね。とりあえず、郷田さんを助けには行きますが、そんな不法行為など手伝う気はありません」

「正義漢気取りだな。まあ、いい。その話は帰ってきてからゆっくりしよう。とにかく急いでくれ。そんなに時間がないんだ。窪地に水がどんどん溜まっているらしい」

「水が？ そんなに切羽詰っているのなら、初めからそう言ってくださいよ」

地図とロープを引っ掴み、安川は険しい顔で表へ飛び出した。車に駆け込み、ジーンズのポケットから尚美が買ってくれたタオル地のハンカチを取り出し、髪と顔を拭く。胸ポケットから携帯を取り出す。

「もしもし、俺」と、尚美に電話をかける。

「ハッキリとは分からないが、帰りは遅くなりそうだ」

「だいたい何時くらいになりそうなの？」

ダッシュボードの時計に目をやると、六時を指していた。狂っている。そういえば、直しておいてと尚美に言われていたんだった。

袖口を押し上げ、腕時計を見る。七時九分。

「そうだな、上手くいけば九時過ぎには……」

「九時って……台風が上陸する頃よ。一番、雨風が強い頃じゃない、気をつけてよ」

「ああ、出来る限り急いで帰ってくるよ。思ったより郷田さんは大変な状況なんだ。でも、まあ、心配しないで待っていてくれ」

「うん。それと……帰ってきたら話したいことがあるから」

電話をシャツの胸ポケットにしまう。話って何だろう？

地図を念入りに見て覚えこみ、車を走らせる。山の方の道は走ったことがなかったが、それほどややこしくはなさそうだった。

郷田が通った道を安川もたどった。商店街を抜け、海岸へと向かう。真っ暗な闇の中、安川の白い車は浮かぶようにして走った。

田所産業に入って半年しかないが、安川はもう辞めようと思った。法に触れることをしてまでする義理はない。ただ、そうなると尚美との関係が微妙になるかもしれないと、それだけが気がかりだった。会社を辞めたからといって分かれるつもりはない。だが、尚美はどう思っているのか。入った会社を半年で辞める、そんな男をどう思うだろうか。職をなくした男とこれまでと同じように付き合ってくれるだろうか……。

他に車が全然走っていないこともあり、安川は少しスピードを上げた。死にそうな状況に置かれている今の郷田の様子が気になった。シャツの胸ポケットから携帯を取り出し、前方と画面を交互にちらちらと眺めながら電話をかける。時間がもったいなくて路肩に車を停めるつもりはなかった。警察に見つかれば罰金ものだが、安川の頭には警察も罰金も浮かんでいなかった。

「もしもし、郷田さん」

「ああ、安川か。悪いな、台風の中」

「そんなことはいいですよ。それよりどんな様子です？」

「もうちょっと経てば運転席に水が入ってくる。急いでくれ。今どの辺りだ？」

「海岸線を走っています」

「まだそんなところか……」と、郷田が落胆の声を漏らす。

「これでも急いでるんですよ」

「すまん。時間がないんだ。急いできてくれないと俺は溺れてしまう。何しろここは掘り鉢の底のようなところで、山に降った雨が全部流れ込んでくるんだ」

「とんでもない状況ですね。まさか溺れそうだななんて、思ってもみませんでしたよ。社長もずいぶんですよ、厭な仕事は全部郷田さんに押し付けて……。やっぱり不法投棄をやっていたんですね、そうかなとは思ってましたけど」

「聞いたのか。そういうことだ。会社は不法投棄をやっている。お陰でこのざまだ。失望しただらう？ まあ、当然だな」

「ええ。すぐって訳じゃないけど、会社、辞めようと思います。あんな社長に関していたんじゃろくなことになりませんか」

「そうだな、確かにろくなことにはならない」

噛み締めるように郷田が言った。

「なあ、安川...」

「何です？」

「お前、今村老人が失踪している話しを知っているか？」

「ええ、知っていますよ。ニュースでやっていましたから」

「お前が向かっているこの場所、ここは今村老人の土地なんだよ」

「へえ、そうなんですか。奇遇なことがあるもんですね」

「奇遇なもんか。お前は鈍いな。今村老人が失踪して、その土地に不法投棄しているんだぞ、何かあると思うのが普通だろう」

「ということは……社長が今村老人の失踪に関係している？」

「恐らくな。俺と社長は二週間前、今村老人に会い、土地の使用を申し出た。ここは絶好の場所だったからな。だが、今村老人は聞く耳を持たず、けんもほろろに俺たちを追い返した。もし今村老人が戻ってきたとして、こんな時期に不法投棄があったなら、俺たちが真っ先に疑われるに決まっている。ところがどうだ、社長はまったく気にしていないんだ。自信たっぷりに、心配するなって言って……。おかしい話だろう？ 社長は最近、今村老人と会ったことがあるような感じだったし……」

「そうですね……。社長が関係していると思わざるを得ませんね」

「何処かに監禁して脅して、無理矢理、契約書にサインさせようとしているのかもしれないな。いや、それだけならまだいいが……今村老人はもう戻ってこない知っているかのような口振りだった」

「今村老人はすでに死んでいると？ 殺し……ですか？ まさか社長が……」

「たぶんな。失踪して五日以上も経つんだ、そう考えたほうが自然だろう。そんなに都合よく今村老人がいなくなるわけがない。誰かに頼んだのかもしれないが、俺が思うに、おそらく社長やったんだよ。あの爺さんも頑固だったからな、人を見下したようなところもあったし、口論になって、カッとなって社長が殺した、そして何処かに埋めたんだろう、この辺りの山の中に……」

「いくらなんでも社長がそこまでやるとは……」

「社長の性格はお前も知っているだろう。カッとなったら何をしでかすか、分かったもんじゃない」

「それは知っていますが……」

郷田が急に黙った。

「郷田さん、どうかしたんですか？」

「厭な予感がしたんだ。死体を埋める場所はこの辺りにいくらでもあるが、社長が埋めるとしたらここなんじゃないかって……」

郷田の声は微かに震えていた。

「まさか、そんな」

「いや、きっとそうだ。なんだかそんな気がする。でなきゃ何でここに廃棄物を棄てさせる？ここを掘り返せないようにしたんだ、絶対そうだ。掘り返すには所有者の許可が要る。その所有者は許可を出せない。永遠にこのままだ。……変だと思ったんだ、わざと積み残したようだったし、こんな台風だというのにダンプを走らせるなんて。ああ、俺は知らないうちに社長の手伝いをさせられていたんだ。死体遺棄っていうんだろ？ 証拠隠滅か？」

「考えすぎですよ、郷田さん」

「安川、頼むよ、急いでくれ。もうこんなところにはいたくない。……なあ、安川。妙なことを言うようだが、俺がここに落ちたのは祟りのせいじゃないかな」

「祟り？」

「だって、崖が崩れたんだぜ、突然。用心していたのに。引きずり込まれたような感じで、どうやったって抜け出せないんだ。今村老人が祟っているとしか思えない。台風にしても、今村老人が呼び寄せているのかもしれない」

死が眼前に迫り、郷田は精神をおかしくしてしまったようだ。

「あと三、四十分でそちらに着くでしょうから、それまで頑張ってください」

郷田の怯えた声が安川の耳に残った。

祟りだなんて、おかしなことを考えるものだ、死んだと決まったわけでもないのに。

安川は、郷田が哀れになってきた。

精神をおかしくした原因の根底は社長の存在だろう。会社での主従関係がプライベートにも持ち込まれ、郷田はしばしば田所の酒につき合わされている。鬱積のはけ口として利用され、それに郷田は抗えない。

いつからの付き合いかは知らない。腐れ縁なのだろうが、それにしても郷田は何でも田所の言いなりだった。そして恐れていた。恐れているからこそ、違法だと知りつつ田所の不法投棄を手伝っている。そんな田所が今村老人を殺したのでは、と郷田は言う。たかが不法投棄のためにそこまでするだろうか――とぼんやり考える。また、田所ならやりかねないとも思う。今村老人を殺してその死体を掘り鉢の底のような投棄場所に埋め、さらに廃棄物を上から被せる。役所は手をつけられず、今村老人は永遠に廃棄物の下――。

安川にも郷田の言っていることが本当かもしれないと思えてきた。田所の日頃の言動からすれば、十分に考えられることだった。

あんな男の元で働けるか！

辞職の決意を新たに、安川はまだ手に持っていた携帯電話を胸ポケットにしまおうとした。

一時小降りになっていた雨が再び激しさを増し、必死に意識を前方の路面に傾ける。そうすると、尚美に電話したときはすんなり入ったのに、口のよれたポケットに上手くしまえなかった。強引に押し込もうとしても入っていかないとしない。

フロントガラスを激しい雨が叩いている。ワイパーがせわしなく動いている。

入っていない携帯に苛つかされ、ポケットに目をやろうとした刹那、不意に対向車が現れ、安川はヒヤリとさせられた。片手ハンドルで何とか躲したが、横風に煽られている車体はさすがに重く感じられた。無理をすると事故を起こしそうだ。胸ポケットを諦め、携帯を助手席に置く。

車が海岸線から山へと向かう道に入る。

安川は闇の中に一人きりだった。自分も郷田と同じように、闇の中に放り出されていると思うと、安川は言い知れぬ孤独感に苛まれた。

早く帰りたい、尚美の元へ。

知らず知らずのうちにスピードメーターが上がる。

時間が気になり、安川は腕時計を見ようと左腕を目の前に持ってきた。だが、袖口に隠れ、腕時計が見えない。口で袖口を押し下げようとする。と、急に車体が振られた。慌てて左手を戻し、ハンドルを切る。が、ハンドルは強い力に取られたまま言うことを聞かない。車は突風に煽られていた。勝手に横滑りを始め、道の端へと追いやられる。安川は急ブレーキを踏んだ。目いっぱい踏み込んだ。しかし効き目はなかった。車は雨の降り続いた路面を勢いよく滑るだけだった。フロントガラスの向こうに白っぽい棒が映った。あっ、と声をあげる間もなく、吸い込まれるようにして安川の車は電柱に激突した。何がどうなったのか分からないまま、安川の意識は薄れつつあった。

俺も祟られたのか？

そんなことをふと思った。

頭から血を流しながら、安川はハンドルにぐったりともたれかかった。

とっくに着いてもいい時間なのに――。

郷田は焦っていた。運転席にまで水が浸入してきている。腕時計を見ると、八時十五分になっていた。

何をしているんだ、安川は。道に迷ったのか？

しかし、迷うほどの道ではない。

いったいあと何分待てばいいんだ。

安川がどの辺りにいるのか知りたくて、郷田は電話をかけた。

呼び出しのコール音が鳴る。何度も鳴る。だが、安川は出なかった。

一旦切って、もう一度かける。結果は同じだった。安川は出ない。

おかしい。何かあったのか？ 電話に出られないだけか？

いや、何かあったに違いない。

郷田は猛烈な不安に襲われ、田所に電話した。

「社長、郷田です。安川から何か連絡がありましたか？」

「安川から？ 何もないぞ。どうしたんだ？ 安川は一緒じゃないのか？」

「まだ来ないから何かあったんじゃないかって思ったんですよ。そうですか、そちらにも連絡は入ってませんか。安川はどうしちゃったんでしょうね」

「この風雨だからな、用心して運転してるんだろ」

「それにしても遅いですよ」

「そうだな、ちょっと遅いな。車が故障でもしたか」

「だったら何かしら連絡があってもいいじゃないですか。あいつは、そういったところはキチンとしていましたからね。連絡もできないような何かがあったんですよ」

「お前は心配性だな。携帯が壊れたのかもしれんし……」

田所の声にはいつもの嘲りが含まれていた。

「さっき電話したばかりですから、そんなはずはありませんよ。きっと事故でも起こしたんですよ、こんな天気の中を運転させられていたんですからね」

郷田は嫌味を込めて言った。

「お前が窪地に落ちて、今度は安川が事故だと？ そんな偶然があるわけがないだろう。今にあげられかんとした顔で現れるさ」

「社長はそうやって暢気に構えていられるでしょうが、こっちには時間がないんだ。安川が来ないのなら、社長がこっちに来てくださいよ」

「俺が？ 俺がこんな台風の中を運転するのか？」

「仕方がないでしょう、他に誰もいませんからね。それとも、すぐには来られないような事情があるんですか？」

郷田は、田所が『ようこ』のママと一緒になのではないかと疑った。電話の向こうで、女の息遣いが聞こえた気がした。

「そんなことはないが……もう少し待ったらどうだ、安川はきっと現れるって」

「待てないよ！」

思わず出た強い口調に、郷田は自分でも驚いた。自分の中に湧き上がる嫉妬を意識する。社長は陽子と一緒に、俺は死にそうな目に遭っているというのに――。

「おいおい、いつからそんな口が利けるようになったんだ」と、威圧して田所が言う。

謝るべきだとは思ったが、もうあとには引けなかった。

「こっちは命がかかっていますからね。社長がすぐに来ないというのなら、こっちにも考えがありますよ」

「考え？ 考えて何だ？ ずいぶんと威勢がいいが、俺を脅しているのか？」

「どうとってもらっても結構です。俺は市民の義務を果たすだけですよ」

「お前の口から市民の義務なんて言葉を聞くとは思いませんでした。不法投棄を告発するのかわ？ だったらお前も同罪だぞ」

「確かに同罪だけど、俺は社長に無理矢理やらされたただけだ、罪は軽い。それよりも、もっと大きな罪を社長は犯しているでしょう？」

一瞬の沈黙のあと、田所が低い声で訊く。

「何のことだ？」

「とぼけるつもりですか。社長は今村老人がどこにいるのか知っているはずだ」

「俺が？ 知るわけないだろう」

「いや、知っている。それはここですよ。俺がいるまさにこの場所ですよ」

「馬鹿な……何を根拠に。死体でも出てきたのか？」

田所が愚弄してきても、郷田は冷静だった。

「そんなことを言うんなら、もう来てくれなくていいですよ。俺は警察に救助を求めますから」

「待て、郷田！ 分かった。分かったから、警察には電話するな。今から向けに行く」

田所の狼狽振りが郷田には見えるようだった。

「そうそう。初めからそう言ってくればよかったですよ。それじゃあ、早いところお願いしますね」

電話を切った郷田は、田所への勝利感に酔っていた。心の中で快哉を叫び、これからは田所と対等の立場になるのではないかと思った。しかし、その喜びも束の間、ひたひたと満ちてくる水によって現実へと引き戻された。

運転席にまで達した水は、すぐに座席を飲み込むだろう。死んでしまっただけでは元も子もない。

郷田は外へ出るのを余儀なくされた。風雨に晒されるのは嫌だったが、どうしようもなかった。

ドアを開けて水の中へ入ると、郷田の身体を怖気が走った。この下に今村老人が埋められているかもしれないとの思いが脳裏をよぎり、郷田は急いで崩れた斜面へと向かった。斜面はダンプのヘッドライトに照らされ、暗い闇に浮かび上がって見える。そこだけが安住の地に思え、郷田は向かいかけた。が、思うように足が動かず、今にも今村老人が泥の中から自分の足を掴むのではないかと恐れた。馬鹿な考えなのは分かっていた。だが、今日のような荒れた天気の日、魑魅魍魎の仕業にも思える嵐の夜には何があってもおかしくない――。

幸い今村老人には捕まらず、郷田は斜面の中程まで登った。斜面には相変わらず滝のように泥の水が流れており、郷田が登ろうとするのを邪魔する。それは郷田がここから逃げ出すのを阻止するかのようだった。運転席で取り戻していた身体の熱が、暴風雨に晒されたせいで奪われた。郷田は胎児のように身体を丸くした。背中を雨に叩かれながらじっとしていた。そうするより他になかった。少しずつ斜面を上がってくる水位に怯えながら、田所が来るのを待っているしかなかった。

どれくらい時間が経ったのか、不意に携帯の呼び出し音が鳴った。社長が来られなくなったのかと危ぶんだが、発信者は松本尚美だった。小さな会社なので一応電話番号を登録してあったが、これまでかけたこともかかってきたこともなかった。それがかかってきたということは、安川に関してのことに違いない。安川から何らかの連絡があったのだろう。

「もしもし、郷田です」

「郷田さん、大丈夫？ ダンプが動かなくなっちゃって聞いたけど」

尚美は詳しい話を知らないらしい。郷田はあえて自分の苦境を伝えようとはしなかった。伝えたところで尚美に何かができるわけではない。

「ああ、今のところな。それよりも安川のことだろ？」

「ええ、そうなのよ。トシちゃん、そこにいるんでしょ？ 私、心配になって電話したんだけど出てくれなくて。携帯が故障しちゃったのかしら。トシちゃんと替わって欲しいんだけど」

尚美の元にも安川からの連絡はなかったようだ。郷田は落胆した。安川に何かあったのは間違いない。このまま社長が来るのを待っているしかなさそうだ。

「残念ながら、ここにはいないんだ」

「どうして？ もう着いている時間じゃないの？」

「安川はどういうわけか来なかった。一度、連絡があったんだが、そのあと電話しても出なくて……だから代わりに社長が来ることになったんだ」

「どうなってるの？ 携帯の故障だけだったら、そっちにいけると思うんだけど……。まさか…
…事故？ ねえ、郷田さん、トシちゃんは事故に遭ったの？ ああ、きっとそうだわ」

尚美の声が暗く沈む。

「まだそうと決まったわけじゃないから……」と慰めてみたが、自分でもその可能性が高いと思っている郷田は、言葉が続かなかった。

「いいえ、私には分かるの。トシちゃんは事故に遭ったのよ。どうしてくれるの？ 郷田さんのせいよ！」

返す言葉がなかった。尚美の言うとおりで。自分がドジを踏みさえしなければこんなことにはならなかった。いや、あれは――

「私、生きていけない、トシちゃんが死んじゃったら……」

尚美が声を立てて泣き出した。

「まさか、そんな……」

そこまでのことを郷田は考えていなかった。しかし、死にそうな今の自分の状況を考えると、あながち安川がそうならもおかしくないと思える。安川のほうがほんの少しだけ先だったというだけ――。

「ごめんなさい、郷田さんのせいにして。トシちゃんがいなくなってしまうかもしれないと思うと悲しくて、私、つい……」

郷田は安川が羨ましかった。これほどまでに想ってくれる女性に巡り会ったことがない。こんな俺では当然か、と自嘲する。

「いいんだよ、俺が馬鹿だったんだ」

「ううん、馬鹿なのは社長よ。こんな台風の夜に仕事をさせるなんて無茶だったのよ。だからこんなことになるのよ。私、社長を赦さない」

電話は突然切れた。

尚美がどうするつもりなのかは分からないが、おそらく会社は辞めるだろう。安川が死んでしまったら、それこそ復讐するかもしれない。

俺も社長を赦さない――と郷田も思った。だが、いざ会社を辞められるのかと自問すると、自信がなかった。捕まるのが分かっている警察へ告発できるかどうか分からない。郷田は自分の弱さが忌々しかった。今までのことを謝ってくれさえしたら、こんな目に遭わせた田所を赦してやってもいいかと思い始めた。

赦してやる？ 俺が？

郷田は田所に対して傲慢な口を利いたことを後悔した。

赦してもらうのは自分のほうじゃないか。あんな態度をとってしまって、クビを言い渡されるかもしれない。俺の代わりなんていくらでもいる。

風雨は強くなったり弱くなったりしたが、水かさはどんどん増していた。

携帯をズボンのポケットに押し込み、郷田は腕時計を見た。八時五十五分。田所が着くにはまだ早い。順調に来ていたとしてもまだ山の入り口あたりだろう。何事もなかったなら、今頃は陽子ママと一緒にただだろうに。郷田は、ふん、と鼻を鳴らし、にやりとした。ほんの少しだけ復讐を果たせた気がした。

水面を叩く大粒の雨がヘッドライトの明かりに映っている。運転席まで水没したというのに、ヘッドライトはまだ生きていた。奇妙な思いで郷田は水の中から点されているヘッドライトの明かりを見つめた。この明かりはそのうち消えてしまう。そして、その次は――

明かりが消えないうちに、少しでも上の安全地帯に移っておきたかった。郷田は斜面に手をかけた。四つん這いでそろりそろりと登る。足場を踏み固め、張り付くようにして田所が来るのを待った。その間にも水位は上昇を続け、確実に郷田の足元に迫っていた。

まだか。社長はまだ来ないのか。もう着いてもいい時間だ。

郷田は豪雨に耳をそばだてた。聞こえるのは激しい風の音だけで、たとえ近くまで来ていたとしても、この状況では車の音は聞こえそうになかった。ということは――

とっくに着いている可能性もある、との考えが郷田の頭をよぎった。俺が死ねば社長の悪事を知る者はいなくなる。とっくに着いていて、遠くから様子を見ているのではないか。助けに来るふりをして、俺が溺れ死ぬのを待っているのではないか。

やはり警察に救助を求めればよかった。もうどうなっても構うもんか。捕まったとしてもこのまま溺れ死ぬよりましだ。

郷田は這いつくばったままの姿勢で、ズボンのポケットから携帯を取り出した。右手で身体を支え、左腕の肘を泥の地面につき、左手だけで操作する。雨で濡れないように、携帯を胸で隠すようにしてボタンを押す。斜面での不自然な体勢――1、1と押したところで、郷田の肘が滑った。次の瞬間、携帯は郷田の胸に押しつぶされ、左手とともに泥の中にのめり込んでいた。急いで引き上げる。脇腹にこすりつけて、泥水を拭う。

「ああ」と、大きなため息が漏れた。自分のドジさ加減に嫌気がさし、泣きたくなった。

携帯から光が奪われていた。これでもう警察に連絡する手段はなくなった。告発もできないし、救助も求められない。あとは――来るか来ないか分からない社長を待つしかなくなった。それは意味のないことに思え、郷田は絶望感に苛まれた。

いつの間にか風雨が弱くなっていた。台風の目が近づいたのだろうか。今までの轟音が嘘のように、辺りは静寂に包まれていた。

と、暗い闇の中に一条の光が見えた。車のエンジン音も聞こえる。こんなところ、こんな時間、しかもこんな天気の中をやってくるのは他に考えられなかった。

社長が来てくれた！

郷田は全身の力が抜けそうだった。まさに地獄に仏。見捨てられたかもしれないという田所への疑念は完全に払拭され、感謝の気持ちでいっぱいだった。目頭が熱くなる。

やがて暗い闇の空に、バタンとドアの閉まる音がした。少し離れていたが、それは崖が崩れるのを用意しているのだろう。

「郷田、まだ生きていますか？」

田所の声が郷田には慈愛に満ちているように感じられた。涙がはらりと落ちる。

「生きていますよ、社長。ありがとうございます、来てくれて。社長が来てくれなかったら俺はもう……」

「俺とお前の仲だ、助けに来るのは当然だろう。ちょっと待ってろ、今、命綱を結わえるから」

郷田からは見えなかったが、田所が木の幹にロープを結わえ、そのロープと自身とを繋ぐのが想像できた。

しっかりと繋いでくださいよ。社長まで落っこちたら万事休すだ。

郷田の心には余裕が生まれていた。水位の上昇がいくら速いといっても、もう助かったも同然だった。それに、田所がそれほど怒っていないことにも安堵した。

ひょっとしたらすべてを水に流してくれるかもしれない。何しろ、会社設立から十数年ともに苦勞してきた仲だ、些細な反抗などきつと赦してくれるに違いない。社長にとっても俺は必要はずだ、これからも不法投棄は続けなければならないのだから。

腰にロープを結わえ、おそろおそろ崖の際に近づいてくる田所が見えた。雨合羽を着て、手に別のロープを持っている。懐中電灯の明かりが眩しい。

「ロープを垂らすぞ、いいか？」

「ええ、お願いします」

田所は手に持ったロープの端をしっかりと腕に巻きつけ、もう一方の端をそっと中空に放った。落下したロープは郷田が張り付いている斜面の、右一メートルほどのところで止まった。田所が照らす懐中電灯の明かりの中、郷田は必死に手を伸ばしてロープに飛びつき、懸命に掴んだ。少し滑り落ちたが、その手にしっかりとロープを握り締めている郷田には微塵の不安もなかった。急いで立ち上がり、田所が支えてくれているロープを頼りに泥の斜面を登り始める。あせって登る郷田の姿は不恰好だった。あまりに焦ったため、足が滑った。ロープは放さなかったものの、地面に顔から落ちて滑稽でさえあった。泥の顔に郷田は照れ笑いを浮かべた。

「急がなくても大丈夫だ。もっとゆっくり登ってくれ。腕が痛い」

「ああ、すみません、社長。気をつけます」

田所の声に安心し、郷田はひと呼吸おいた。

「ところで、郷田……」と、田所が改まった口調で呼びかけた。

「何です？」

「どうしてお前は、俺が今村老人を殺したなんて思ったんだ？」

「すみません、変なこと言っちゃって。どうかしてたんです。こんなところに取り残されて……雨風がすごくて……。忘れてください」

「いいから言ってみろ。何か根拠があったんだろ？」

「根拠っていいですか……今村老人が死ねば社長には好都合ですから」

「好都合なのは確かだが……それだけか？」

拍子抜けしたように田所が言う。

「状況的に社長が一番怪しいと思ったものですから……。言動もおかしかったですし。すみません、本心じゃなかったんです」

「根拠はないのか。それじゃあ、ただの勘というわけだ」

「勘は勘ですが……」

やけに探りを入れてくる。妙な胸騒ぎがして、郷田は再び斜面を登り始めた。が、足が滑り、なかなか登れない。

「警察には電話したのか？ 市民の義務だとか言って、ずいぶん意気込んでいたが……」

「してませんよ、そんなもん。正直、しようかなとは思いましたよ。でも、携帯が壊れてしまって……」

言わずもがなの一言だった気がした。

「壊れたのか。本当に救いようのないドジだな」

何かを確信したかのように、田所がほくそ笑む。

「俺は社長が来てくれると信じていました。俺を見捨てたりしないと分かっていた。だから嵐の中でもじっと待っていることができたんです。俺は社長を頼って生きていくしかないんです。これからも社長の元で働かせてください」

情けないほどおべっかを使っていると自分でも思いながら、郷田は腕の力だけで登っていた。腕だけで自分の体重を支え、少しずつ崖のふちに近づいていた。しかし、あと数メートルのところまで来て郷田の腕はしびれ始めた。握力も落ちてきている。懇願するように、郷田はロープの先の田所を見た。

「腕が疲れてしまいました。もうこれ以上は……。お願いします、社長のほうで俺を引っ張り上げてくれませんか？」

「ああ、分かった」と言い、田所が悪魔のような笑みを漏らす。

ふわりと浮いた感覚――郷田は身体が軽くなった気がした。ダンプごと落っこちたときと同じ感覚だった。瞬間的な出来事のはずなのに、落ちていく時間がやけに長く感じられた。

田所にロープを放され、郷田の身体は泥の斜面を滑り、水の中に落ちて飛沫を上げた。田所が水の中の郷田を懐中電灯で照らす。

「どうして……」

水面から顔を出し、郷田は顔を拭った。泥水にぬれた髪を後ろへ撫でつけ、ゆっくり斜面へ歩き出す。急いだところでどうにもならないことは分かっていた。社長に見捨てられた――。信じたくはなかったが、それが突きつけられた現実だった。

崖の上の田所は冷笑していた。

「お前が何か証拠を掴んでいるんじゃないかと心配していたんだが、取り越し苦労だったようだな。それが気がかりでここまで来たんだ。何も証拠は残していないはずだと自信はあったんだが、得てして過信は破滅へと繋がるからな。だが、お前はそんなもん何も掴んじやいなかった。ただの勘だったとはお笑い種だな」

「やはり今村老人は死んでいたんですね。社長が今村老人を……」

郷田は水位が膝下くらいのところで立ち止まった。

からかうように照らす懐中電灯の明かりが腹立たしい。

「俺が殺したと言いたいんだろ？ 残念だったな、俺じゃない」

「違う？」

だったら誰だ？ 社長の他にもいるのか、今村老人が死んで得する奴が。

怪訝な顔をする郷田を面白がるように、田所が半笑いの口を開いた。

「六日前だ。俺はここが諦められなくて、何とかならないかと再度今村老人にお願いに行ったんだ、強力な助っ人を連れてな。誰だと思う？」

どうせお前には分からないだろう、とでも言いたげな口調だった。悔しいが、強力な助っ人と言われても誰も思いつかなかった。ヤクザか政治家かと考えを巡らせたが、違うような気がする。ヤクザはともかく、政治家につてがあるはずがない。あったとしたら、これまでもっと上手く立ち回っていたはずだ。

そのとき、車のクラクションが二回鳴った。社長には同乗者がいたようだ。誰だろう？ 同乗者が強力な助っ人なのか？

「まだ終わらないの？ 早くしてよね」

車中から聞こえてきた女性の声、苛つくその声に郷田は聞き覚えがあった。

「陽子ママと一緒にだったんですね。俺が死ぬのを待っているように聞こえましたが、陽子ママも今村老人の殺害に関係していたんですか？」

「ああ。強力な助っ人というのは陽子のことだ」

どうして陽子ママが強力な助っ人なのか、どうしてこの件に関係しているのか、郷田は腑に落ちなかった。恋人だから手伝ったというだけではなさそうだ。

「面食らったようだな。無理もないか。そもそも、今村老人の山の存在を知ったのは陽子に聞いたからだ」

「陽子ママに聞いた……」

どうして陽子ママは今村老人のことを知っていたのだろう。郷田の疑念は膨らむばかりだった。

「新たな処分場を探していると言ったら、それなら絶好の場所があるって教えてくれたんだ。そして二週間前、お前と二人でここを見に来た。自然が作ったでっかいゴミ箱のようで、お誂えの場所だった。だが、お前も知ってのとおり、交渉は上手くいかなかった。陽子から今村老人の人となりは聞いていたが、思っていた以上に頑固で猜疑心の強い人だった。そこで、今度は陽子を連れて行った。陽子の話なら少しは耳を貸してくれるんじゃないかって期待してな。陽子は、あたしが行っても無駄よって言ったんだが、俺はそうは思わなかった。何とかなると思った。いや、上手く説得できるんじゃないかとさえ思った。何故か……。陽子が強力な助っ人だという理由……。それは、陽子が今村老人の実の娘だからだ。一人で暮らしているが、唯一の肉親である娘がいたんだ。地元の年寄りも覚えているだろうから、時期に陽子の存在はマスコミにも知れ渡るだろうな」

「娘……。陽子ママは今村老人の娘だった……」

呆けたように郷田は呟いた。

「ずっと音信不通だったらしいんだが、そこは唯一の肉親だ、血は水より濃いというからな、今村老人も陽子になら胸襟を開いてくれるんじゃないかと思ったんだが、却って逆効果になってしまった。まったく聞く耳を持つようとしてくれなかったばかりか、遺産を盗みに来やがったな、なんてぬかしやがって……。最初は陽子も受け流していたんだが、あまりにもしつこく遺産泥棒って罵られて、しまいには読んでいた新聞を投げつけられたもんだから陽子はキレちゃって……」

郷田は田所の話の続きを聞くのが苦痛になった。話の流れから、誰が今村老人を殺したのかは分かった。娘が実の父親を殺すなんて――。

「陽子ママだったなんて意外でしたよ」

「俺だって意外だった、陽子があんなことをしでかすなんて。ちょっとは陽子の気持ちも分かるがな。玄関先だったんだ。家にあげようとしなかったんだぜ。娘が何年かぶりに尋ねてきたというのに、玄関先で追い返そうとしたんだ、あんまりだよな。カッとなって陽子は今村老人を突き飛ばした。今村老人は転んだ。転んでコンクリートの三和土に頭を打ちつけた。うんうん唸っている父親の頭を持って、陽子は二度、三度と三和土に打ちつけた。残酷だったな。動かなくなって、俺は泡食ったね。俺も同罪だ、死体を隠さなくちゃならない。俺と違って陽子は落ち着いていた。落ち着くどころか、積年の恨みを果たせたって顔をしていた。陽子がここに埋めるのを提案したんだ。私有地だから許諾がなければ行政は手を出せないって言ってな。それから死体を車で運び、投げ捨てた。そして埋めた。陽子は上から見ていた、満足そうにな。六日前はこんなじゃなかったからロープがなくても上り下りはできたんだ。まあ、それでもかなりしんどかったけどな。それで埋めることは埋めたんだが、時間がなくて浅くなってしまった。『ようこ』の开店時間が迫っていて、急いで帰らなくちゃならなくなった。折を見て埋め直しに来ればいいと思い、俺たちは帰った。ところが台風の接近だ。ここに水が溜まるのは分かりきっていたから、俺は恐れたよ、死体が浮き上がってくるんじゃないかって。だからコンクリート片を棄てに来させた。お前が落ちたのは予定外だったが、結果的には上手くいったようだ。死体が浮き上がってきたとしても、お前に今村老人殺しの罪を被ってもらえばすべて片がつく。警察に訊かれたら言うてやるよ、二人は前々から犬猿の仲でしたってな。陽子も協力してくれるだろう」

社長の策略にはまったまま、この掘り鉢の底のような場所で朽ち果ててしまうのか。

郷田の胸中に、打ちつけている風雨に負けないほどの激しい怒りが湧いた。

「俺に罪を被せようとしても、そう上手くはいきませんよ。安川も知っている。今村老人を殺したのは社長じゃないかって話しておきましたからね、安川が警察に話してくれますよ」

「安川か……」

「安川は不法投棄のことも知ってますよ。会社を辞めるって言ってましたから、知ってることはすべて喋るでしょうね」

少しは田所にダメージを与えたくて郷田は言った。しかし、田所はまったく意に介していなかった。ふふふ、と厭な笑い声を漏らした。

「来る途中で見かけたよ、安川の車を。前がグチャグチャに潰れていたな、あれじゃあ助からないだろう。お前より先に逝ってしまったようだな」

安川はやはり事故に遭っていたのか。

郷田の胸中に哀悼と諦観が去来する。

もう何もかもおしまいだ――。

このまま俺は汚名を着せられ、社長と陽子ママはぬくぬくと――

郷田は下を向いた。さっきは膝下だった斜面の水位が、田所と話している間に腿まで達していた。雨は小ぶりだったが、山からは相変わらず大量の水が流れ込んでいる。

郷田は急いで斜面を駆け上がろうと、泥に沈んだ足を引き抜こうとした。が、泥に刺さった足は、渾身の力をもってしてもどうにもならなかった。

おかしい――。

何か強い力で足首を掴まれているようだ。

郷田は焦った。脳裏に、憎々しげに睨む今村老人の顔が浮かんだ。

その顔が、お愉しみはこれからだ、とでもいうように笑った。

「わあ、放せ！ 放せ！」

恐怖の叫び声を上げ、郷田は逃げようともがいた。

「俺は社長に命令されてやっただけなんだ！ 崇るんなら社長を崇れよ！」

悪いのは俺じゃない、と喚きながら、どうにかして泥の中の足を抜こうとする。が、どうやっても足は抜けない。足首に激痛が走り、もがいていた郷田はバランスを崩した。そして前に倒れてしまった。

水しぶきが上がり、郷田の顔は水中に没した。急いで起き上がろうとするが、今度は手が泥に刺さって抜けなくなってしまった。何かが郷田の手首を掴み、泥の中へ引き込もうとする。水中の郷田はやがて動かなくなった。

何だ？ 今のは。

奇妙でおぞましい光景。

崖の上から郷田の最期を見ていた田所は、呆然となった。

放せ――

社長を崇れ――

郷田の言葉から思いつくことはひとつしかなかった。

今の光景は今村老人の崇りなのか？

元来、そんなオカルト話を田所は信じなかった。しかし、目の前で郷田は急に動けなくなり、奇妙な格好で死んでしまった、何者かの力に抗いきれなかったかのように。

いや、そんな風に見えただけだ。ただの事故だ、祟りなんかのはずがない。ドジな郷田がへまをやっただけだ。そう思うように努めるが、言い知れぬ恐怖が湧き上るのを、田所は抑えられなかった。

崖の際からゆっくりと後退り、自分の身体に結わえていたロープを解こうと手をかける。

どうということだ？

強く縛ったはずはないのに、解けない。指を立てて爪をロープに食い込ませるが、結び目はびくともしない。

「おいおい、勘弁してくれよ」

誰に言うともなく呟き、笑って見せたが、それは引きつっていた。

田所はロープを結わえてある木に向かった。身体のほうが解けないのであれば、木のほうを解くしかない。木の幹に結わえたロープを解きにかかる。

が、どういうわけか、こちらも解けない。強力なボンドで接着されたかのように、結び目はきつく固まっている。

こんなことって――

田所はうろたえた。同時にどちらも解けなくなるなんて、そんなことがあるだろうか。

祟り？ 馬鹿な――

「陽子、ちょっと来てくれ」

田所は平静を装い、車で待つ陽子に声をかけた。

陽子が億劫そうに窓から顔を覗かせる。

「何よ、終わったの？」

「ああ、終わった。終わったが、困ったことになった。ダッシュボードにナイフがあったはずだ、持ってきてくれ」

「ナイフなんて何に使うの？」

警戒するような陽子に、田所は苛立った。

「いいから早く持って来い」と、声を荒らげる。

真っ赤なレインコートを着て傘を差し、手にナイフを持って陽子が近づいてくる。

「ナイフをいつも持ってるの？」

「まあな。護身用だ」

「それで、郷田さんは何か証拠を掴んでいたの？」

「いや、そんなもの、何も掴んじゃいなかった。ただの勘だ」

「やっぱりね。だからそう言ったじゃない。あなたは心配性なのよ」

「そんなことはいいから、早くナイフを」

「何に使うの？」

田所から距離をとったまま、陽子が同じことを訊いた。おちよくるように、手に持ったナイフをひらひらさせる。

「見れば分かるだろう、ロープが解けないんだ」

「解けなくなるほど結ぶなんて……ほんとにドジね」

ドジー—合田に何度も投げつけた言葉だ。ロープが解けないのは郷田の祟りなのか？

田所が手を伸ばして近づくと、薄ら笑いを浮かべ、陽子は逃げるように後ろへ下がった。犬のように木に繋がれたままの田所には、それ以上近づくすべがない。

「遊んでる場合じゃないだろ、早くよこせよ」

「さあ、どうしようかしら」

陽子はなおも薄ら笑いを浮かべている。

「何？ 陽子、どういうつもりだ？ 冗談にもほどがあるぞ」

「あたし……考えたのよ」

「何を？」

「あなたにもいなくなってもらったほうがいいんじゃないかって」

「この期に及んで裏切るのか。誰が爺さんを埋めたと思ってるんだ。俺が埋めてなきゃ、とっくにばれてるぞ」

「偉そうに、なによ。死体を見て茫然自失だったじゃない、真っ青な顔をして。あたしが言わなかったら、逃げ出したんじゃないの？ 埋めてるときだって、怖いもんだから早々に切り上げて。あのときもっと深く掘ってればよかったのよ」

「店の開店時間が迫っていると思って、気を利かせたんじゃないか」

「どうだか。そういうことにしたただけでしょ。あたしは、急いでなんてひと言も言わなかったわよ」

田所は何も言い返せなかった。あのときは早く帰りたくて仕方がなかった。

「こんな言い争いをしてる場合じゃないんだ。頼むよ、ナイフをよこしてくれ」

それでも陽子は微動だにしなかった。

そして冷たく言い放った。

「やっぱり無理ね」

「何故だ？ 誰にも言わない。だから、な、お願いだ、助けてくれ」

「誰にも言わないですって？ 信用できるわけないでしょう。自分の武勇伝を自慢してばかりじゃないの。小心者のくせして見栄っ張りのあなたは、そのうち店の女の子に、ここだけの話とか言って、事件のことを何かしら喋るに決まっているわ」

「絶対喋らないから……」と言いつつ、田所は、匂わせるくらいのことはするだろうと思った。この数日、誰かにその話がしたくてうずうずしていた。

「それに……」

陽子は話を切り出したものの、先を続けようかどうしようか、迷っているようだった。

「何だよ、言ってみろよ」

田所の挑発するような物言いに、陽子が口の端を歪める。

「それじゃ言うけど、このまま生かしといたら、いずれあなたはあたしの遺産を狙ってくるわ」

「そんなもの……いや、そりゃ、ちょっとは援助してもらおうかもしれないが。何しろ会社は上手くいってるとはいいがたいからな」

「嫌よ！」

きっぱりと言い放つ陽子に、田所は驚いた。

「嫌よって……。ひょっとして、お前ははじめから遺産が目的だったのか？」

「そうよ。悪い？ 来年は五十になるのよ。そろそろ楽な生き方をしてもいいんじゃない？ これまでがさんざんだったんだから」

田所の中に沸々とした怒りが湧いた。

「俺を利用しやがったな」

「利用したですって？ あなたがやったのは死体を埋めたことだけじゃない。本当は父を殺すのもやって欲しかったのに」

「何だと？ あの目配せはそういう意味だったのか」

田所は思い出していた。意味ありげな陽子の視線。あのときは、何か言い返しなさいよと言いたいのだと思っていた。まさか、殺せという意味だったとは――。

「鈍くて頭にきたわ。喧嘩っ早いあなたのことだから、交渉が上手くいかなくなって、きっと手を出すと思ってたんだけど、期待はずれだった。父に言われっぱなしで、情けなかったわ」

「お前だって言われてたじゃないか、遺産泥棒って。当たってたんだな。てっきり、そんなつもりはないのにひどい言われようで、カッとなったのかと思ったんだが、見透かされていたわけだ」

眉根を寄せる陽子に、田所は一矢報いた気がした。

「そうよ。昔から父は何でもお見通しだった、学校のサボりも仮病も。子供の父親が誰か分からないってことも」

「子供？」

「あら、言ってなかったかしら。高校のとき、子供を墮ろしたのよ。あの頃は誰とでも寝ていたから、俺の子じゃないってみんな逃げたわ。さすがに気が咎めたし、お金もなかったし、一応言っておかないと、と思って父にしおらしく謝ったのよ。父は激怒したわ、命を粗末にするとは何事だって。それまでも何度も怒られたんだけど、そのときは半端なかった。殺されるかと思うくらい殴られて、それで家を出たの。それからずっと家に帰らなかったわ。五年前、母が死んだのを人伝に聞いて葬式に行ったんだけど、父は何しに来たって顔をしてたわ。追い返しこそしなかったけど、一言も口を利かなかった。秘かに和解を期待してたんだけど……」

そのときのやるせなさを思い出したのか、陽子は小さな溜め息を吐いた。そして苦笑いを浮かべ、話を続ける。

「家を出て、いつか父を殺したいと思ったわ。でもそんな憎悪は長くは続かないものよ。いつしか父の記憶も薄れ、父のことはどうでもよくなっていた。それが母の葬式での、あの態度で蘇ったの。あたしの中に再び殺意が芽生えた。しかも父が死ねば遺産はあたしのもの。目の前の山々のすべてがあたしのものになると思うと、初めて自分も幸せになれるんじゃないかって気がした」

「五年間も殺意を溜め込んでいたのか、今度は薄れなかったわけだ」

「遺産が欲しかったからね。でも殺したいほど憎くても、いざ実行するとなると……」

「俺がきっかけとなったんだな」

「そうよ。あなたにやらせて遺産はあたしのもの——そう目論んでたんだけど、あなたは何もできなかったから仕方なく自分でやったのよ」

「あれが仕方なくか？ 嬉しそうに見えたぞ」

田所は皮肉をこめて言った。

「ふん。何とでも言えばいいわ。結局、父を殺したのはあなたってことになるのよ。郷田さんを殺したんだから、もうひとり増えてもいいわよね？」

田所の脳裏に、奇妙な格好で死んでいった郷田の姿が浮かんだ。

「お前は見ていなかったから知らないだろうが……郷田を殺したのは俺じゃない」

「何をいまさら。俺じゃないって、他に誰がいるのよ」

「お前の父親」

「父が？」

一瞬戸惑った陽子だったが、すぐ破顔になった。

「馬鹿なこと言わないでよ。あなたがその手で埋めたじゃない」

「崇りだよ。郷田は妙な死に方をした、崇りを口走りながら」

「あたしを怖がらせたいの？ お生憎様。崇るなら崇るがいいわ。ちっとも怖くなんかない。それ以上に、あたしは父が憎いわ。あなただって聞いたでしょう、三十年ぶりに口を利いたっていうのに、その言葉は、何しに来たよ。お前が来るところじゃないって……あんまりだわ。もしかしたら昔のことは水に流してくれるんじゃないかって期待したあたしが馬鹿だったわ。実の父娘なのよ。それなのにちっとも変わってなかった。昔の、やんちゃだった頃のあたしを見る目だった。校長をしていて地元の名士気取りだった父にとって、あたしは恥知らずで目障りな存在だったんでしょけど、それにしても三十年以上も前の話よ。忘れてくれてもいいじゃない。なのにあの頑固ジジイときたら……」

吐き棄てるように陽子は言った。

そのとき、ふたりの耳に、異様な音が聞こえた。

ゴォーゴォーゴォーと低く唸る音が、山の上方から聞こえてくる。

上方からの不気味な音は、確実に近づいている。

地面に揺れを感じ、ふたりは顔を見合わせた。

「何よ？ 何なの？」

陽子はパニックに陥っていた。

「山が崩れるんだろう、かなりやばそうだ。俺を見捨てたらお前も助からないぞ。ナイフをよこせ。それからエンジンをかけておけ」

陽子が運転できないのを知っている田所は、強気になって言った。

陽子は従順に頷いて田所にナイフを渡すと、乗ってきた車をめがけて一目散に駆けていった。

ナイフを受け取った田所は、原とロープの間にナイフを差し込み、二度三度と切りつけた。なかなか切れない。おかしい。それでも五度目にしてロープはやっと切れた。ロープを地面に投げ捨て、田所は車へ走った。

「何やってたんだ！」

一刻を争うのに、エンジンはかかっていなかった。

「変なのよ。何度やってもかからないの」

そう言いながら陽子はイグニッションキーを回した。キュルルと、情けない音が車中に満ちる。

「どけ！ 俺がやる」

助手席から運転席に身を乗り出し、イグニッションキーを何度も回す。エンジンがかかる気配はなかった。ガソリンはたっぷり入っているし、来るときは何も異常はなかった。なのに――
祟りか？

逃げられないようにしているのか？

田所は苛立ち、焦った。地響きが迫ってくる。もう時間がない。

と、エンジンが心地いい唸りを上げた。

助かった――。

互いに安堵の顔で見合う。

それが――恐怖の顔に変わった。

ふたりは闇の向こうに、まるで大きな口を開けたかのように押し寄せてくる泥の波を見た。

ふたりは呑まれた。衝撃が襲い、車を小舟のように押し流す。車はなすすべなく窪地の底へと落とされ、その上を泥や木々が覆い被さる。

弱まっていた風雨が再び強くなり、辺りは荒れ狂う轟音に包まれた。

台風一過の朝は清々しかった。晴れ渡った空の下、あちらこちらで清掃や危険物の撤去が行われている。

病院の三階の一室に尚美はいた。傍らには痛々しく頭に包帯を巻いた安川が寝ていた。椅子に腰掛け、尚美はずっと安川の手を握っていた。その手がピクリと動き、うつらうつらとしていた尚美は、安川に目を向けた。

「気がついた？」

「ああ」

安川が眩しそうに目を開け、尚美の泣き腫らした顔を見る。

「どうやら助かったようだね」

「脳波には異常がないって言われたんだけど、このままトシちゃんが目を覚まさないらどうしようって、そればかり考えちゃった」

尚美は微笑みながら、涙をひと滴落とした。

「ごめんよ、こんなことになって」

ううん、と尚美は首を振った。

「でも、本当によかった。夕べ、警察から電話があったときは心臓が止まりそうになったわ。病院に駆けつけるとトシちゃんは頭に包帯を巻いていて……」

「俺の怪我はひどいの？」

一晩中心配させられた尚美は、ちょっと意地悪をしたくなった。

「とっても」

あまりに安川が落胆の色を見せたので、尚美は慌てた。

「うそ、うそ。たいしたことないわ。頭を打ったから、念のために一週間くらいの検査入院だって。事故の状況だと即死でもおかしくなかったらしいわ。車はペシャンコ。助かったのは奇跡的だって。運がいいのよ、トシちゃんは」

「運がいいなら事故には遭わないよ」

「それもそうね」

ふたりは小さな笑みを漏らした。

安川が窓の外に目をやる。

「台風、行ってしまったようだね」

「うん。今は太平洋。明日には北海道にまた上陸するかもしれないって。でも、その頃には熱帯低気圧に変わるらしいわ」

「太平洋か……。初めから逸れてくれてたらいいのに」

「そうね。そしたらトシちゃんがこんな目に遭うこともなかったのに。台風が来たりするから……。ううん、社長よ、社長のせいよ」

「そういえば郷田さんは？ どうなったの？」

「それが……連絡が取れないのよ。社長とも」

「社長とも？ 社長は事務所にいたんじゃないか……」

「トシちゃんの代わりに行ったらしいの。社長も事故に遭ったのかしら」

「ニュースでやってるかもしれない。テレビを点けてくれないか」

尚美は窓際においてあった小型テレビのスイッチを入れた。

市街地の倒れた木や瓦の剥がれた屋根が映る。

濁った水を湛えた川は氾濫してもおかしくなかったが、不思議とその増水をとめていた。大型の台風だったわりに市街地の被害は少なかった。

崖崩れで通れなくなった道路が何箇所かあった。橋を流された箇所もあった。

画面に白い事故車両が映った。電柱に激突しており、前部が大破している。電柱は折れ曲がり、今にも倒れそうだった。

「あれ、トシちゃんの車じゃない？」

色は白いし、原形をとどめている後部から判断すると同じ車種だった。

「そうだな……」

安川が瞠目し、ごくりと唾を飲み込む。よく死なずにすんだと思っているのだろう。

ニュースでは他の事故についても情報を伝えた。昨日の台風の影響で二件の交通事故が発生しており、そのうちの一件は安川の事故、あとの一件は強風にあおられて田んぼに落ちたという軽い事故だった。その事故者の名前は田所ではなかった。

「社長、事故じゃなかったようね」

「いったいどうしちゃったんだろうな」

画面が変わり、山間部を映した。緑に覆われた山の一部が醜く抉られ、茶色の地肌に変わり果てている。逸れはまるで悪魔の爪あとのようだった。

「ひどいわね」と同意を求めるように尚美は言ったが、安川の反応はなかった。食い入るように画面を見つめている。

この辺りは行方不明になっている今村さんの所有する土地で……とニュースが伝えた。

「このおじいちゃん、ついてないわね、山がこんなになっちゃって。行方不明になってずいぶん経つみたいだけど何処に行ったのかしら。ニュースを見てびっくりしているかもね」

さっきから何も言わなくなった安川の顔を、尚美は覗きこんだ。

「ねえ、聞ってる？」

「ああ」と、我に返ったように安川は答えた。

「何か考え事してたの？」

「ここ、昨日行こうとしてたところだよ」

「えっ？ じゃあ、郷田さんがいたところ？ 郷田さんのダンプが動かなくなって……ええっ、それじゃあ、社長も……。なんてこと」

「郷田さんたちはあの泥の下なんだろう」

尚美は沈痛に顔を歪めた。赦せないと思った社長だったが、死んだとなるとさすがに悼みを覚えた。

「尚美、悪いけど警察に電話してくれないか」

「郷田さんと社長の遺体を捜してもらうのね？」

「それもあるが……行方不明の今村さんもあそこにいるかもしれないんだ」

「どうして？ 何でそんなことをトシちゃんが知ってるの？」

訝る尚美に、安川は優しく微笑んだ。

「郷田さんから聞いたんだ。郷田さんは、社長が今村さんを殺してあそこに埋めたんじゃないかって言ってた。確かなことじゃないらしいけど」

「社長が殺人犯……大変だ」

尚美はバッグから携帯を取り出し、警察に電話した。その様子を安川はぼんやりと見ていた。

「すぐ来るって」

「そうか。……ねえ、尚美」と、安川は暗い顔で呼びかけた。

「なあに？」

「尚美は崇りって信じる？」

「崇り？ そんなもの信じないわよ。変なこと聞くのね」

「変なことだよな、やっぱり。俺も信じちゃいなかったけど、何かそんなものがあるような気がしてきたんだ」

「崇りって、今村さんの？ それで郷田さんや社長が死んだって言うの？ トシちゃんの事故も崇りのせいなの？ 怖いこと言わないでよ」

尚美は思わず泣きそうになった。

「怖がらせてごめんよ。だけど、そうとしか思えないんだ。呼び寄せられるように、次々とあそこへ行ったんだ、俺も社長も」

「でも、トシちゃんは奇跡的に助かったじゃない。ほら、崇りなんてないのよ」

「だけど、俺は今村さんとは面識がなかったし、不法投棄にも関与していなかったからこの程度にしてくれたのかもよ」

崇りをなすものが報復を重くしたり軽くしたりするなんてことがあるのだろうか。

よく分からなかったが、その考えは面白いと尚美は思った。

「それもあったかもしれないけど、可愛そうだと思って生かしておいてくれたのかもよ」

「可哀想って、誰が？」

「私と、そして……」

安川の鈍さに、尚美はまた意地悪をしたくなった。

「何だよ、勿体ぶって」

「あとで教えてあげる」

微笑を残し、尚美は窓際に立った。そこから見える景色に台風の影響は何もなかった。晴れ渡った空の下、いつもの日常が繰り広げられている。商店は通常に営業しており、道路には車が行きかっている。夕べの台風の話でもしているのか、おばさんが立ち話をしている。隣の小学校からは子供たちの声がうるさいくらいに聞こえてくる。

そして病院の駐車場に、パトカーがゆっくりと滑り込むのが見えた。

「警察、来たわよ」

振り返って尚美は言ったが、安川は聞いているのかいないのか、返事をしなかった。ぼんやりと考え事をしているようだった。

「今度は何を考えているの？ また変なこと？」

「うん……」と漫然と返事をしたあと、「なあ、尚美」と安川は続けた。

「なあに？」

「俺は男でも女でも、どっちでもいいぞ」

どうやらやっと気づいたようだ。ぶっきらぼうな物言いでも、尚美は嬉しかった。

だが、男女の区別がそんなに早く分かるはずがなく、安川の無知ぶりに、尚美はまたまた意地悪をしたくなった。

「まだ分からないわよ。トシちゃんの次の就職先が見つかって、それから……」

「それから？」

「ちゃんとプロポーズしてくれたら分かるかも」

尚美の頬を熱い涙が伝った。

了